



第八十七号

## 地唄・箏曲の伝承

メルマガnoichi87号、今月のテーマは「地唄・箏曲の伝承」。芸の伝承とは何か。  
古典から現代まで五百曲を超えるとされる正派の伝承曲を如何に体得していくか。  
雅楽之一が見解を述べます！



今月のメルマガでは、私の専門分野である「地唄」について書いてみようと思います。

私の肩書きを正式に書きますと「生田流箏曲演奏家、地唄三弦演奏家」となります。日本の伝統楽器である箏（こと）と三弦（三味線）の奏者であるという意味です。生田流では格上に当たる三弦の方を先に書くのがより一般的ですが、私が所属する正派邦楽会が箏の団体というイメージが強く定着していることや、私が外向けの活動

で箏の方を多く活用していることなどがあり、箏、三弦の順に書くようにしています。私は他にも胡弓を演奏したり、低音箏と言われる十七弦を演奏したり、作曲をしたりもしますが、それらは副業みたいに考えるようにしています。肩書きとしては一番大事な箏と三弦のみを書くようにしています。この二つを敢えて「一番大事」と言うのは、私が専門とする分野が歴とした古典芸能であるからで、芸能の基礎・源流である三弦と箏の古い作品（古典）を伝承することに最大の

の意義があるという私の信念に基づくものです。「お稽古は、古い作品から」というのが、私が守り貫いてきた Motto でもあります。

正派では、江戸期に生まれた作品のみを「古典」と呼んでいます。例えば、幕末に活躍した幾山検校の代表作に《秋の露》という曲があります。この曲は伝統的形式である手事物に則って作られています。革新的な部分もあり、幾山検校が明治初期まで活躍したことなどもあり、正派では、「最期の古典」と位置づけそれ以降に作られた作品と一線を引いています。また正派で

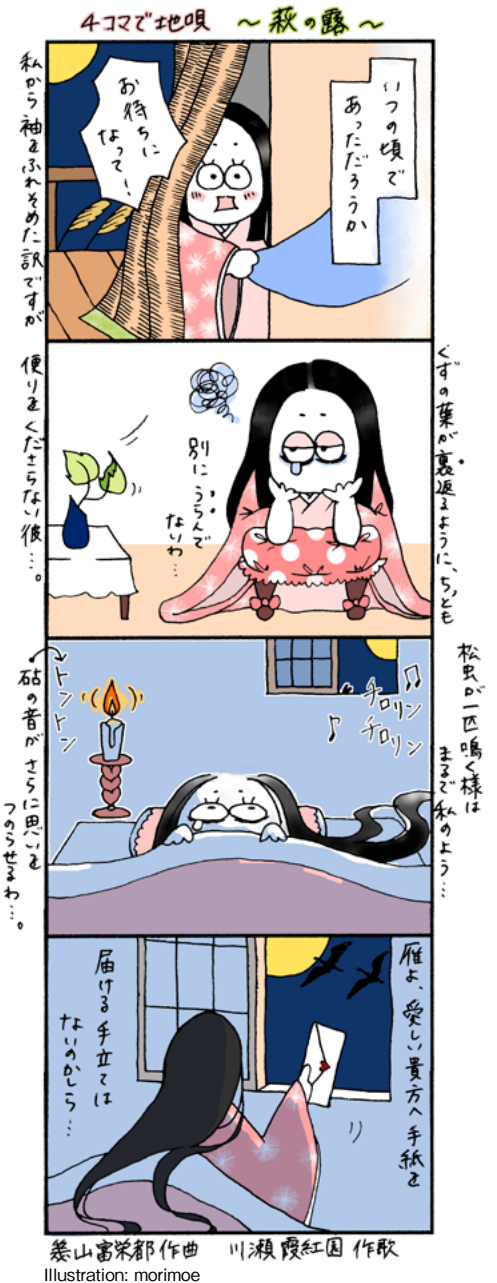
は、続く明治時代に生まれた曲を明治新曲と称し分類するようにしています。生田流各派の中でも正派にはこの明治新曲が多く伝承されているという特徴があります。理由は、まだ盲人の方が多く活躍していた時代に中島雅楽之都が実際に検校さんの許へ通つて、その時代に生まれた曲を次々に採譜し残したからです。今日では、明治新曲は江戸期の古典に比べると圧倒的に演奏機会が少ないのですが、音楽的な遜色はなく、曲調や題材も明るいものが多く、現代人の趣向からしても、もつと積極的に演奏していった方がよいと私は思っています。

以上、常日頃私が大事に思っている古典、明治新曲について簡単に触れましたが、古典から明治新曲までの芸能の礎が築かれたこの約二百年は、かの有名な楽聖・宮城道雄がまだ一世を風靡する以前の話です。そのことから、箏曲の歴史が如何に多彩で、奥深いものであるか、お分かりいただけるかと思えます。

私は幼少より祖母からお箏を教わりました。また、祖父からはお三弦を教わりました。中島雅楽之都から伝えられた大切な伝承曲を祖母から学べましたことは、私の心の支えであり、芸の原点であります。当初から祖母に幾度となく言われてきた「正派の芸と心」を後世に伝える使命が自分にはあるとも思っています。如何なる時も、ただ目新しいものにばかり飛び付くのではなく、温故知新の精神を持って答えを導き出すことが、私のような立場の者には大切である、それが祖母の教えなのだと思います。

最後にご報告ですが、来春より、私は正派の副家元の任に就くことが正式に発表されました。より責任のある立場で勉強し、経験を積んで、いつの日か相応しい正派の後継者となれるよう、一生懸命に努める所存です。最後までお読み頂き、ありがとうございます。

雅楽之一



◎あとがき◎

十年ほど前から動画の仕事も担当するようになって、音の世界に興味をもつようになった。その前は好きな音楽を聞いているだけだったから気楽なものだ。この音がいいとか悪いとか、好き嫌いだけで勝手なことを言っていた。しかし実際に動画に使う音が必要となると話が違ってくる。映像はビジュアルの方が重要に思えるかもしれないが、実際は半々に近いと思う。映像の意味やニュアンス、感覚、感情など、音で変わってしまう。しかも一口にいい音と言っても、人によっても違うし、リアルな音と言っても、オンマイク(マイクを通して)の音に近づけるのか、楽器から聞こえる直接の音なのか、ホールの響きまで含んだ環境音をどうするのか、そんなに単純な話ではないと気がついた。

三味線や箏の音は和室で聞いた音が特に美しい。無音のスタジオで録った音とはまったく違う。雅楽之一との付き合いの中で、生の音を聞く機会を得るようになって気がついたことだ。この音を録音して聞かせる方法はないかと考えるが、録音よりも生で聞いてもらう方が手取り早いのかも。三味線の生音を体験する人が増えたら、邦楽に対するイメージも変わっていくに違いない。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

